

「ブラジル体育・スポーツ・レジャー・ダンス史学会第8回大会」 視察報告

山本 英作

Report on ‘VIII Congresso Brasileiro de Historia da Educação Física, Esporte, Lazer e Dança’

YAMAMOTO Eisaku

1. はじめに

FIFA ワールドカップ日韓共催大会でブラジル代表チームが5度目の優勝を遂げた2002年、ブラジル国内の体育・スポーツ史分野の学会ではどのようなブラジル・サッカー史研究が報告されるのだろうか——今回の学会大会視察を思い立った直接の動機は「ブラジル優勝」と結び付いた素朴な疑問によるものであった。しかし、そもそもこのように私が考えるのは、実はW杯前から、ブラジル・サッカー史の近年の研究動向を追う過程で二つのことが気になっていたためである。

一つは、ブラジル人サッカー史研究者たちの見事に現状に即した研究姿勢、すなわち代表チームやサッカー界の動きに敏感に反応して時時刻刻の出来事に因んだ研究を発表する傾向についてであった。例えばブラジル代表がW杯南米地区予選で苦戦していた2001年にも、Cesar Gordon と Ronaldo Helalが“The Crisis of the Brazilian Football: Perspectives for the Twenty-First Century” (*The International Journal of the History of Sport*, Vol.18-3, September, 2001 所収) という論文を発表している。ブラジル・サッカー界がまさに先行き不安な状況にあった当時、同論文の結論部分は「ブラジル・サッカーの将来はどうなるのだろうか」と自問自答して終わっていた。W杯を成功裡に終え、サッカーの至福に酔っているであろう現段階においては一体どのような研究が報告されるのか。

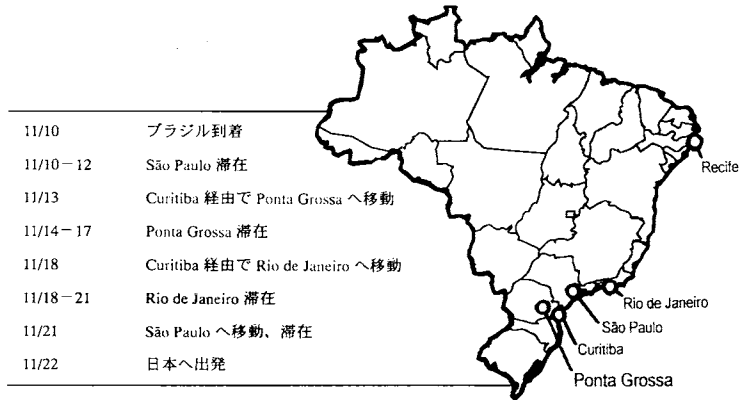
気になっていたことのもう一つとは、彼らが変わらず保持し続けてきた自国サッカーの伝統的歴史像をめぐる論争についてであった。前回の私のブラジル滞在中(1998年4月～2000年3月)、現

地サッカー史家たちの中で盛んに論議をよんでいた問題(後述する Mário Rodrigues Filho の小説 *O Negro no Futebol Brasileiro* をめぐる議論)がその後どのように帰結したのかということ、日本に帰国した私はなかなか把握することができていなかったのである。ブラジル人による「ブラジル・サッカー史像」が歴史的にどのようにして形成されてきたのかという問題が、目下、私の関心の中核にあり、2002年のブラジル国内学会視察こそ研究上の大きなヒントを与えてくれるであろうと期待したのである。

渡航前に書きまとめた視察目的は、1) パラナ州ポンタグロッサで開催されたブラジル体育・スポーツ・レジャー・ダンス史学会第8回大会(VIII Congresso Brasileiro de História da Educação Física, Esporte, Lazer e Dança)に参加し、同学会の現状を確認・把握すること、2) 学会大会の前後にサッカー史研究の拠点となる主要大学等研究機関を訪ね、近年の研究動向について現地研究者と意見交換を行うこと、3) W杯の年に多数刊行されるサッカー関係の文献を入手することの3点であった。滞在期間は2002年11月10日から22日までの実質13日、次頁のような行程で4都市を周った。

2. 第8回学会大会について

ブラジル体育・スポーツ・レジャー・ダンス史学会(Congresso Brasileiro de História da Educação Física, Esporte, Lazer e Dança)は今日、ブラジル国内の体育・スポーツ史分野では最も重要な学会である。会長はロンドン大学LSE(London School of Economics and Political Sciences)で経済学を修



旅程とブラジル略地図

めたレジャー史研究者 Ademir Gebara 氏。彼の話によれば、同学会はもともとサンパウロ州立カンピーナス大学 [UNICAMP] 体育・スポーツ史研究グループ出身者のOB・OG会的な研究集会を意図して同氏が創始したが、内外の注目を集めて予想外に参加者が増加し、1993年第1回大会（当時の大会名はI Encontro de História da Educação Física e do Esporte）に35題であった研究発表数が本年第8回大会では約200題（ただし、スポーツ社会学やスポーツ人類学などの発表もかなり含まれている）に達し、ブラジル国内大学の学部生・院生からラテンアメリカやヨーロッパ諸国の一流の研究者までが一同に会する大規模な学会になったと言う。例えば今回はEric Dunning（英国）、Roland Renson（ベルギー）、Paulo Coelho（ポルトガル）、Carlos López Van Vriessen（チリ）といった外国人研究者の姿が見られたが、前回2000年大会にはJames Mangan（英国）、Gertrud Pfister（ドイツ）、Joseph Arbena（米国）らも参加している。ちなみに私も日本から初めて参加した「珍しい」存在として開会式の席で紹介された。

さて、ポンタグロッサ市の Vila Velha Palace Hotel で開催された大会期間中、開会式、歓迎パーティー、招待講演、分科会研究発表、シンポジウム、自由研究発表、閉会式といったプログラムが順次進行した。三つの会場で午前8:30、午後14:30の2回に分けて開始される分科会研究発表、さらに夜20:30から再開される自由研究発表（主に大学生や院生の論文発表あるいは研究計画の発表セッション）と3部制をとって行われる研究発表

は参加者をホテル内に缶詰めにするものであったが、座長の判断で柔軟にコーヒー・ブレイクが盛り込まれたり、また、22:00頃まで続いた夜間セッション終了後、参加者は同市で賑やかに開催されていたドイツ系移民の黒ビール祭り“München Fest”の会場へ自由に流れて夜更けまで楽しむなど、全体としてハードなわりに肩がこらないバランスよいプログラムが組まれていた。

ブラジル・サッカー史を取り上げた発表は15題。これは全体の発表総数から考えるとやや少ない印象を受けるが、サッカー史関連では学会発足以来最多である。2002年ならではの発表として、W杯ブラジル優勝を報じる新聞記事をColin Campbellの理論を援用して分析した研究、監督名Luiz Felipe Scolariに因んで「スコラリ・ファミリー」と呼ばれたW杯代表チームやスポーツの「家族性」を問う研究、スター選手による慈善事業の歴史に関する研究などは新鮮であった。研究手法



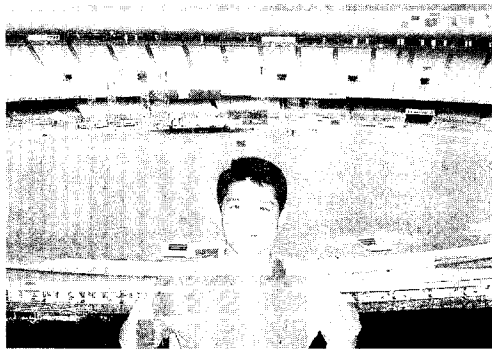
A. Gebara 学会長(左)、L. C. Ribeiro 氏と

は、実証的な文献研究のほか画像分析やオーラルヒストリーに基づく研究もあり多彩であるが、私が参加してきた日本の体育・スポーツ史関連学会における諸発表と比べるとやや理論重視の姿勢、社会学的・解釈的な傾向が強い（「君は誰の理論を使っているのか」、「その理論だけでは弱い」といった質疑応答を頻繁に耳にした）。過去の発表動向も含めて概観すれば、サッカー史上の実に様々な出来事が諸研究の興味あるモチーフとなっており、スポーツ史研究の題材としても事欠かないブラジル・サッカーの豊かさ、深さを痛感する。五つ企画された大会シンポジウムの一つの中で、Luiz Carlos Ribeiro氏（パラナ連邦大学 [UFPR] サッカー史研究グループ）は広くブラジル社会論・文化論に位置付けたサッカー史研究の必要性を提唱した。

今回大会には、国内の代表的な体育・スポーツ史研究機関（サンパウロ州立カンピーナス大学 [UNICAMP]、パラナ州のパラナ連邦大学 [UFPR]、リオデジャネイロ州のガマフィーリオ大学 [UGF] やリオデジャネイロ州立大学 [UERJ] など）から多数の参加が見られた。しかし、サッカー史研究に限って言えば第一人者と目される研究者の発表が少なかった。この理由を「皆がこの学会大会で発表することを目指していた時期のピークは過ぎ、我々は研究活動の場を広げつつある」と説明する研究者がいた。実際、ヨーロッパや中南米諸国の研究集会へ出かける人が増えたようだ。学会で目当ての研究者に会えなかった私は彼らを追ってリオデジャネイロへ向かった。

3. リオデジャネイロ訪問について

リオデジャネイロではまずマラカナン競技場へ



マラカナン競技場にて

足を運んだ。リオは何度も訪れているが、今回はひととき感慨深くこのスタジアムを見渡した。マラカナン競技場の正式名称は Estádio Mário Filho（マリオ・フィーリオ・スタジアム）。「第二次大戦後初の1950年W杯開催国として世界最大のスタジアムを建造し、『ブラジル人の実力』を示すべきである」と自ら主宰した *Jornal dos Sports* 紙で主張しスタジアム建立に奔走したジャーナリスト Mário Rodrigues Filho の名を冠している（1966年没後、リオ州議会が認定）。この M. R. Filhoこそ、人種差別を克服して社会上昇を果たしていく黒人・混血サッカー選手たちのサクセス・ストーリーを描いた小説 *O Negro no Futebol Brasileiro*（ブラジル・サッカーにおける黒人、1947年初刊・1964年改訂）の著者である。サッカーが未だ学問の対象と見做されなかった時代、同書は1960年代までのブラジル・サッカー史を最も詳細に記録した年代記とされ、ブラジル人研究者たちは M. R. Filho が記述した史実を長らく自国サッカー史研究の最も重要な史料として位置付けてきた。しかしながら1996年学会大会以降、Antônio Jorge Soares（ガマフィーリオ大学 [UGF]）が一連の論文を発表し、小説記述の作意性、人種主義に対する固執、そして M. R. Filho の著書を盲目的に引用・参照してきた研究者たちの姿勢をラディカルに批判した。一方、1999年、これに反論して同小説の史料価値を再評価したのが Ronaldo Helal（リオデジャネイロ州立大学 [UERJ]）らであった。

A. J. Soares氏はボタフォゴ海岸に近い彼の自宅で、R. Helal氏はマラカナン競技場に隣接する大学の研究室で私のインタビューに応じてくれた。その詳細はここでは省略するが、要するに彼らが



A. J. Soares氏(右)の自宅にて

展開したのは、歴史資料や研究方法論についての議論であると同時に、多人種多民族国家ブラジルにおいてサッカー史が表象するナショナル・アイデンティティーをめぐる問題であった。M. R. Filhoが人種主義に注目して記述したブラジル・サッカー史像は今なお重視されている。A. J. Soares氏は、ブラジル・サッカー史研究の発展に資する建設的な批判的態度に込めた信念を“mutatis mutandis”というラテン語を用いて語っていたが、彼の研究成果が大いに評価されていることも事実である。R. Helal氏の話では、W杯におけるブラジル代表チームのパフォーマンスにブラジル国民は依然として特別の思い出があるけれど、彼らのサッカーに対する付き合い方やサッカー観は時代とともに少しずつ変化していると言う。

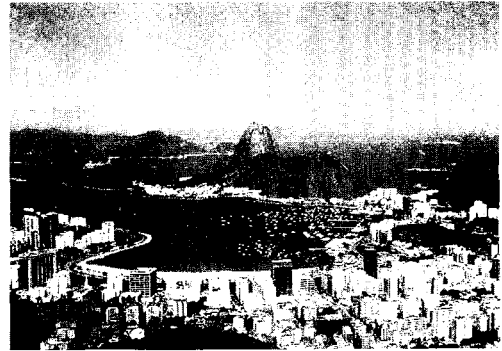
ところで、驚いたことにA. J. Soares氏とR. Helal氏は仲の良い友人同士で、上述した論争の経緯を1冊の論文集にまとめて2001年に出版していた。ブラジルの学術振興機関CNPqの「スポーツと文化」研究プロジェクトにも一緒に携わっているそうだ。

4. おわりに

2002年のブラジル国内学会大会視察を主目的

としたこの度のブラジル訪問において、新たな情報と資料を入手し貴重な人的関係を築くことができた。ブラジル・サッカー史研究のいわば表層と深層に係わる動向を、実際に現地を確認することができた。今回の成果を研究に生かし、次回学会大会（ペルナンブコ州レシーフェ市、2004年開催予定）に臨むことができればと思う。

「平成14年度筑波大学栗原基金海外派遣」により渡航費の助成を受けたことに感謝したい。



リオデジャネイロの風景
(コルコヴァードの丘から)